

遠山景晋がみた南部領—未曾有記から—

上白石 実

解説 遠山景晋と未曾有記

1 遠山景晋とは

本稿で紹介する旅日記『未曾有記』の筆者遠山金四郎景晋（1752～1837）は、天保改革期に老中水野忠邦や同僚の町奉行鳥居耀蔵と鋭く対立した町奉行遠山景元かげもとの実父にして系譜上の祖父である。“遠山の金さん”として庶民に広く名が知られるだけでなく、歴史学者のなかでも注目を集めてきたのは景元だが、近世後期の国際関係や外交政策を研究してきた筆者としては景晋の方に興味を覚える。

遠山家について、寛政改革のときに作成された大名・旗本の系譜である『寛政重修諸家譜』と、景晋自身が享和元年（1801）に作成した履歴書「静定公履歴」¹⁾をもとに、景晋の経歴とともに丁寧に見てみよう。

景晋は、1000石取りの旗本永井筑前守直令なおよしの四男として宝暦2年（1752）に生まれ、明和4年（1767）16歳のとき500石取りの旗本遠山景好かげよしの養子となった。天明6年（1786）家督を相続し遠山家当主の通称である金四郎を名乗った。さっそく小普請組宮城久三郎の支配に入り、將軍徳川家治に御目見えをして、家督相続のお礼を述べている。1000石取りの永井家から500石取りの遠山家に入ったわけだが、旗本の四男坊としては一生部屋住みで終わることを考えると望外の喜びだったと想像できる。

景晋が所属した小普請組とは、3000石以下で無役の旗本・御家人が所属するところだから、当然景晋も無役である。そのため時間に余裕がある景晋は、江戸幕府直轄の学問所である昌平坂学問所で研鑽をつづけた。そして、寛政6年（1794）第2回の学問吟味で「甲科上」、

つまり御目見以上の受験者のなかでトップの成績をあげ、褒賞として時服を拝領している。この時景晋が提出した解答文が、「対則策」の名で学問吟味の参考書として広く伝来している。ちなみに、この時の学問吟味において、御目見以下である「甲科下」で褒賞を受けたのが太田直次郎、つまり天明期を代表する狂歌の作者であり勘定所の記録を書き留めた「竹橋余筆」を残した、蜀山人こと太田南畝である。

学問吟味は、中国の科挙をモデルにしたものであるが、両者には決定的な違いがある。それは、科挙が役人登用のための試験であったのに対して、学問吟味は学問奨励のための試験だった点である。高度に官僚制が発達していた中国では、科挙の合格者、特に状元と呼ばれた首席合格者は皇帝の側近にまで登りつめることも可能であったのに対して、世襲制が厳格に守られていた日本では、学問吟味で褒賞を受けたとしても出世が約束されたわけではなかった。学問吟味は、世襲官僚化し弛緩した武士の子弟に対する学問奨励策や綱紀肅正策だったのである。ところが景晋は急速な出世を遂げ、遠山家代々の当主をはるかにしのぐ役職についている。その理由には、後述する対外問題の発生がある。

学問吟味が実施されたのと同じ寛政6年、景晋は養方弟、つまり養父景好かげよしの実子房五郎を養子とした。後の景善である。このとき景晋は43歳、景善は25歳である。年齢から計算すると、景晋が永井家に養子に入った3年後に景善が生まれたことになる。ところが景晋には、この前年に、後に景元と名乗る実子が生まれていた。景晋は、遠山家直系の景善に家督を譲るため、実子景元の出生の届けを一年遅らせ景善の弟とした。遠山家の家系を直系に戻そうと考えたの

かもしれない。景元は実子であり、年上でもありながら次男とされたのである。このあたりの事情から、遠山の金さんにかかわるさまざまな逸話、例えば刺青を入れていたとか放蕩な生活をしていたという話が生まれたのであろう。

遠山家の混迷はその後も続いている。景晋の養子となり遠山家を相続することが確約されたはずの景善は、養父を見習ったのだから享和3年（1803）には義弟の景元を養子とし、その後に生まれた実子景寿を旗本堀田家に養子に出してしまう。ところがその景善も、家督を相続しないまま文政7年（1824）に亡くなってしまった。そこで景晋は、系譜上の孫である景元を跡継ぎとし、文政12年隠居して家督を譲った。

景晋は天保8年（1837）没し、最初江戸下谷の本光寺に葬られたが、のち駒込の本妙寺に改葬された²⁾。

2 対外問題の発生

学問吟味で褒賞を受けたあと景晋は、徒頭、目付、長崎奉行、作事奉行、勘定奉行と、異例ともいえる出世を遂げた。その理由は、未曾有記に深く関係する対外問題の発生がある。

景晋が活躍した寛政期から文政期、つまり18世紀末から19世紀初頭に日本近海に出没する異国船については、時期により二つに分類することができる。前半がロシア船で、後半はイギリス船である。前半のロシア船とは、オホーツクを拠点に北太平洋海域で毛皮交易を始めたロシアが、交易の拠点として建設したオホーツクを維持するため日本との交易を求め、その交渉のための外交使節を乗せた軍艦で、後半のイギリス船とは、大西洋から太平洋に進出した捕鯨船である。

対外問題の発生という予想もしなかった事態の出現が、景晋をはじめとする学問所出身者が活躍する場を生み出した。新たに発生した対外問題には、前例通りに仕事をこなすことに長けた世襲官僚では対応できず、学問所で豊かな教養と知識を修得した人物に期待が集まったのである。景晋が未曾有記に残した5回の旅は、すべて対外問題にかかわるものである。景晋はま

た、文政8年に発令される異国船打払令の評議にも加わり、打ち払いに反対する意見書を提出している。さらに、その後も対外問題が発生するたびに意見を求められており、経験豊富な外交官僚として活躍していった³⁾。

3 未曾有記

散逸が激しい遠山家の史料だが、その一部は東京大学法学部法制史資料室に「遠山家記録残闕」として所蔵されている。そのなかに、前述した履歴書「静定公履歴」の他に、「文化日記」と題された文化2年から文政2年までの日記がある。これは未曾有記にかかわる旅の期間を除く江戸滞在中の日記である。それゆえ文化日記と未曾有記を合わせると、この時期の遠山の日記がすべてそろえることになる。文化日記のうち長崎奉行として赴任中の部分はすでに『長崎奉行遠山景晋日記』⁴⁾として翻刻されている。

未曾有記と題された景晋の旅日記には、5回にわたる旅が含まれている。

i 未曾有記

寛政11年蝦夷地御用掛松平忠明に従って東蝦夷地を巡見したときの日記。「おくの日誌」とも。『近世紀行集成』⁵⁾で翻刻されている。

ii 続未曾有記

文化2年長崎に来航したレザノフと交渉するため派遣されたときの日記。これも『近世紀行集成』で翻刻されている。

iii 未曾有後記

文化2年西蝦夷地を巡見したときの日記。『近世紀行文集』⁶⁾で翻刻されている。これとは別に蝦夷地での日記として『遠山・村垣西蝦夷日記』⁷⁾がある。

iv 続未曾有後記

文化4年若年寄堀田正敦らと蝦夷地に渡り、帰路太平洋沿岸を巡見したときの日記。

v つしま日記

文化6年朝鮮通信使の易地聘礼のため、林述斎らと対馬を訪れた時の日記。

景晋が、自身の旅日記の表題を「未曾有記」としたことについては、未曾有記の序で、

多くの臣人毛地にゆくも未曾有也、番士にて今度の処置惣奉行たるも未曾有也、番士の身にてかゝる公事につかへまつるも未曾有也、我が家に分れて五世大父の駿城在衛の外旅行の事未曾有也、我が身ひとつにはもとより未曾有なり、往還千里に及ぶ旅行も未曾有也、

と、書いている。蝦夷地に幕臣が巡見すること、小姓組の番士でありながら巡見メンバーに選ばれたこと、遠山家始まって以来の大旅行、景晋自身にとっても初めての旅行など、すべてが未曾有のことだった。

外交官僚として活躍した景晋だが、その一方で和漢の古典や詩歌に通じた一面も持っていた。学問吟味で褒賞をうけたのだから当然かもしれない。また遠山が活躍した時期は、幕府による『新編武蔵風土記考』や『豆州志稿』、諸藩による『新編会津風土記』、『筑前国続風土記拾遺』など、地誌の時代⁸⁾とも呼ばれるほど多くの地誌が編纂された。盛岡藩でも藩主南部利剛の命で『奥々風土記』⁹⁾が編纂されている。

幕府における地誌編纂の中心になったのが昌平坂学問所である。学問所にいた景晋もこの風潮の影響を受けていたはずで、それが彼の旅日記にも表れている。彼は、急ぐ旅のなか歌枕や名所を訪ね、その様子を記録し、考察を加えている。そのため未曾有記は、単なる役人の業務日記ではなく、読み応えのある文化人の旅日記になっている。

4 遠山の陸奥認識

遠山の旅日記から、江戸時代後期の文化人の^{みちのく}陸奥認識を見てみよう。

まずわかることは、陸奥に対する蔑視観である。いつの時代にも自分が住んでいる場所が理想の土地であり、それ以外は蔑視の対象と考える人々がいる。これが日本の国家意識となったのが古代以来の華夷意識であり、朝廷の所在地京都の人々が自分たちから見て東方の人々を蝦夷と呼ぶ理由である。京都から見れば江戸は東夷になるが、徳川家康が幕府を開いて以来200年を経た19世紀には、江戸も京都に匹敵する

だけの文明の地「東都」という認識が、幕府の役人を中心に共有されていった。そのため遠山の旅日記には、しばしば南部領を蝦夷と呼び、蔑視する傾向がみられる。この傾向は三回目の旅の帰路三陸海岸を通った時に特に強くみられる。例えば、種市で焼かれた塩を「味ひハ下品なり」と、久慈で目にした琥珀細工を「目にとゝむへき細工もなし」と表現し、また、この地域一帯における家屋のみずぼらしさを「とりもなおさぬ蝦夷也」としている。

この蔑視観と同時に江戸知識人が陸奥に対して抱いている感情が憧憬である。遠山は、日記のなかでしばしば西行の歌を引用している。自身の旅を芭蕉が西行に憧れて陸奥への旅に出たことになぞらえているのだろう。また、与謝野蕪村「おくの細道図鑑」や井原西鶴「一目玉鈴」などの旅行案内を見ていたのかもしれない。

この蔑視と憧憬が混じり合った複雑な感情こそ、遠山を始めとする江戸知識人が共有する陸奥観といえよう。

本稿では、未曾有記のうち南部領にかかわる部分を現代語訳して紹介する。南部領というと、奥州街道では現在の岩手県北上市鬼柳から青森県野辺地町野辺地まで、沿岸の南限は釜石市平田までであるが、南限を少し伸ばして内陸は一関まで、沿岸は陸前高田までとした。およそ現在の岩手県と青森県東部が含まれる。

未曾有記の文章は、日記ゆえに省略が多くみられる。必要な範囲で補い（ ）に記した。地名なども景晋が聞いたまま記しているため、現在の表記とは異なる場合がある。これも筆者のわかる範囲で補い（ ）に入れた。景晋の文章には詩的な表現が多くみられる。字面の雰囲気を楽しむので無理に現代語することはせず、そのまま残して「 」に入れた。さらに現代語訳が不可能のものも「 」に入れた。古典や歌集からの引用は景晋の記憶違いは修正せず『 』に入れた。

本稿の底本は、国立公文書館内閣文庫所蔵本(117～137)である。

注

- 1) 東京大学法学部法制史資料室所蔵。
- 2) 藤田覚『遠山金四郎の時代』（校倉書房、1992年）、同『遠山景元』（山川出版社、2009年）、岡崎寛徳『遠山金四郎』（講談社、2008年）。
- 3) 上白石実『幕末期対外関係の研究』（吉川弘文館、2011年）。
- 4) 清文堂、2005年。
- 5) 国書刊行会、1991年
- 6) 葦書房、2002年。
- 7) 『犀川会資料』（北海道出版企画センター、1982年）。
- 8) 白井哲哉『日本近世地誌編纂史研究』（思文閣出版、2004年）。
- 9) 岩手県立図書館所蔵。『南部叢書』第1冊。

第1回 寛政11年（1799）未曾有記

遠山景晋の最初の南部領の旅は、寛政11年、数え48歳のときである。きっかけは、同年に実施された東蝦夷地の上知だった。寛政4年根室にロシア使節ラクスマンが、寛政8年にはイギリス人探検家ブロートンが室蘭に来航するなど、蝦夷地への異国船の接近が重なると、寛政11年幕府は東蝦夷地を上知して直轄地とし、書院番頭松平忠明らに東蝦夷地巡見を命じた。当時景晋は西丸小姓組の番士であり、暇なときには昌平坂学問所で教鞭をとっていた。そんな景晋に、2月10日突然松平忠明の巡見に同行するようにとの命令がくだった。

この旅は、3月19日に伝馬朱印状を受け取り、20日に出発、9月14日に帰るまで272日間の大旅行となった。往路は、江戸を出発してから奥州街道を一路青森へ、青森から海岸沿いに松前街道を三厩まで進み、三厩から松前へ渡海。松前から海岸沿いに東へ進み、日高地方の浦川まで巡見した。復路は同じ道を戻り、松前から三厩へ、奥州街道を宇都宮まで進み、日光東照宮に参詣したのち江戸に帰っている。景晋としては見るも聞くも新鮮な、初めての南部の旅である。

【往路】

4月2日 金成から水沢

鬼石 達谷窟の鬼 衣の関

晴天。七半時出立。夜盜坂、十万坂はこれまでになく険しい。登ると山あいにも根もろ山が見える。ここから朝日が昇る。良い景色だ。有壁。鬼死骸村には鬼石といって7尺に4尺ほどの人面に似た石がある。平泉のあたりに達谷村があり、そこから18,9町のところに達谷窟があり、毘沙門堂があるそうだ。昔、この窟屋に達谷という鬼が住み、人民を悩ましていた。坂上田村麻呂が退治したところ、達谷の首がここまで飛んできて石になったという。

一関で昼休み。町の西に田村左京太夫（田村宗顕）の城の大手門がある。磐井川は栗原と磐井の郡境で、土橋があり流れが速い。この川を溝として利用し、杉山がある。これが城である。右には近く、東山がある。山の目町。「らんはやし」。山路の左に杉があり、「丘柏明神」の祠がある。右は吉祥山。

平泉村に牛頭天王の祠がある。右に北上川が流れている。長江である。川を隔てて、たばしね山（東稲山）。桜山ともいう。太田川は小川で土橋。これから北は秀衡（藤原秀衡）の「徒士」の旧跡である。左の杉山の下に薬師堂があり、七堂伽藍の一部であるらしい。金鶏山には金の鶏を納めるという。故事は知らない。いまでも時々金鶏が声を発するという。桜山の下に伽藍の御所の跡があり、秀衡の館という。畑の中に酒泉が湧き出た池があり、昔は和泉三郎（藤原秀衡の子、忠衡）の宅地で、今は百姓茂介の土地である。北上川の向こうの山下に柳の御所があり、清衡の館という。いこまが淵は小池。大きな丘を高館御所といい、義経（源義経）の像があるという。甲冑に太刀を佩き、床几に腰かけ、扇を持ち、丈4尺という。天和3年（1893）仙台侯（伊達綱村）の造営という。弁慶松は中尊寺の入口、民家の後ろにある。その家の印となっている。このほか、何某の松というのも、みな家の印で、畑の中にもある。桜川は小川。兼房松、鈴木松、亀井松がある。衣川村の左2町ばかりはいと関山中尊寺、光堂がある。丈6尺2寸腰回り5尺で、立烏帽子に鎧を着、七つ道具、長刀を杖につき、衣川の中瀬で討ち死

にしたときの形という弁慶像(弁慶堂ともいう)や、紺紙金泥の一切経、最勝経、絵画、その他什物が多数あり、見どころだという。帰路に来るからと、「紳」(儀礼用の帯)に書いて通過する。徂徠先生(荻生徂徠)のなるべし(南留別志)に、荒木重左衛門が奥州に使者として赴いたとき、光り仏の目に入れた金を盗んだ人を詮議するといつて、秀衡の棺を掘り出したという物語がある。このあたりの事であろう。

衣川は土橋。北上川との合流のところが弁慶立往生の場という。衣の関の跡もこのあたりだろう。

和泉式部

諸ともにたゝましものを陸奥の
衣の関もよそに聞く哉
烏丸左少弁光栄卿
昔だに夏にさらせる衣川
かけて朽せぬなも流れけむ

左の月山に雪がある。秋田にあるという。城取川(白鳥川)は小川で土橋。轡(やまかご)では寒いけれど、さすがに初夏で、更紗の襦袢に袷の半衿袴羽織に脚絆草履で、平泉から3里ほど歩行する。今日は「竜谷山に登る日」だけど遠征の身では、薄祭(そまつなまつり)さえ修めることができない。私が幼いころ永昌尼(景晋の母)公が九郎判官の事跡や高館双紙(草子)などの物語を聞かせてくれたのが、古いものを好むきっかけとなった。私が成長した後、書物を読むたびに、九郎判官の事はあの書物にはこのように、この書物にはこのようにあると語り聞かせておなぐさめしたところ、熱心にうなずかれた面影を今も目の前に見るような心地がする。不覚にも涙が流れて道も見えない。同行の人々に見られて女子供のようだと思われることも恥ずかしいので、勉強(努力して)して涙を拭き、心にはない大声を出して歩く心中、誰に向かってつづることができようか。そもそもこの母は、このたびの特命を帯びて君(将軍)にお仕えすることができるように、世を去るまぎわまで神に祈り仏に誓っていたので、もしご存命ならばどれほどありがたく、うれしく思うだろう。旅姿をお見せできないことこそ、くやし

い。しかし、遙か遠方に別れ朝夕私のことのみご心配になって、今日は何処の山を越えたらう、荒海をいつ渡るのだろう、長旅の疲れに苦しんでいないだろうか、と風寒暑温につけてご心配されるという、年齢を重ねてからの心細さを思えば、この世に存命なことを良しとするか、存命ではないことを良しとするかわからなくなる。戻らぬ昔を思い出し、歩く気力も失せ、轡に戻った。

前沢は人足継場。岩水川(岩堰川)は土橋。小山村の右の方に、気仙郡の山々が連なる。そこまで田野が広い。鶴、鵠、白鳥などの作り物が数カ所ある。媒鳥(他の鳥を誘うおとり)らしい。この辺は馬歯(馬鋤)で土を耕すのに、若い女の脛巾(ハバキ、脚絆)で馬の口を牽くという。男は後から「馬くり」を押す。中野村は磐井と胆沢の郡境。左の方に塩釜神社がある。水沢泊。

4月3日 水沢から花巻

田家の女 矢立の杉

曇寒。六時過出立。胆沢川、流れが速い。船橋。川を越えると杉並木の陵(岡)がある。小白山体養寺(泰養寺)。金ヶ崎、小倉沢、大倉沢、2つの土橋。仙台領境の番所があり、ここから南部領。鬼柳から5,6町にある芝山に残った雪がある。鬼柳は人足継場。和賀川、大きな川原、流れが速く、船渡し。昨日まで水かさが増し渡れなかったそう。和賀川の渡役は宮野甚五左衛門、向こうの渡役は蛇口文右衛門。

黒沢尻で昼休み。この辺では女が眉毛を剃ることはない。田家(農家)の女などは必ず風呂敷を頭に巻くという。今日から銭96枚を100文とする。左につづみという大きな池がある。真ん中に2,3間四方の小島があり、一本松がある。「十丈下碇也」。右に北上川が見える。この辺にて川幅10町ほどのひろさ、美景である。宿場の入口の左にある一里塚の杉を矢立杉という。

花巻泊。当地の役人高橋織右衛門の屋敷に泊まる。主人から挨拶があった。櫛丸(おくゆかしい)すぎたが、昨日光堂(金色堂)で手に入

れた弁慶の鍔摺を贈って同志となった。明日から鑄錢（仙台藩の鑄錢）は通用しないので寛永通宝に交換するように命じたが、従者たちは従わなかった。仙台は60を1里とし、南部では70をこみちという。

4月4日 花巻から盛岡

踏み鉄 盛岡の賑わい

曇午後晴。七時出発。宿場の端の右側に陣営（花巻城）がある。溝渠と柵が見える。しばらく町が続く、野道は松並木。千川（瀬川）は船渡し。八幡村、不動丸川（葛丸川）は小さい土橋。北西に南部富士（岩手山）が見えるというが、霧で見えない。石鳥谷は人足継場。松原の右のほうに一重の山が淡雪のなかに青く見える。左の頂上は平らである。山の名前を吾妻山という。滝名川は土橋。

郡山（紫波）で昼休み。二日町、下町、上野村。この辺は土を耕すに齒が前に向いた踏み鉄を用いる。雲晴れて左向こうに南部富士が見えた。峰から右のほうに雪が崩れそう。山全体に雪がある。

城下入口の北上川を船23艘をつないだ橋で渡る。盛岡泊。見る人の多いこと仙台にも勝り、小道に結んだ埒（垣）を人に人を重ねて押し破るように進む。宿舎の座光寺に使いを送り、対面の上感謝を述べる。町奉行伊東庄右衛門が訪ねてくる。

4月5日 盛岡から沼宮内

夫婦山 南部富士 雪浦の垂松

曇午後晴。七半時出立。町中の中津川の板橋を渡り、長坂、俊坂など昇り降りあり。始めの崎（山の鼻）を座頭ころばしという。北上川が山のふもとをめぐって流れている。佳境である。中国の峨眉山の山上から半台へ水が下るのを見ればこのようであろう。おそらくは李白も及ばないだろう。川俣村、柳田村。山道過ぎて渋民の広野に出て、左南に南部富士、右におしみか嶽（姫神山）、対に見える。富士と夫婦山という。南部富士とは岩鷲山で、高さ2里、あるいは富士の3分の2という。津軽の磐城山（岩木山）

とこの山と、共に富士の形に似ているので奥富士と呼ぶ。土民は南部富士・津軽富士という。このあたりの野に時としてこの山の影がうつることがある。雨後の水気に日の光が映ることもあるという。6日に清水村観音堂の下にある別当と思われる家で休憩しているとき、そこにいた男が、南部富士は5月25日が人の登ることができる日で、その前は雪で登ることが難しい。5月から7月に登ることができるという。正一位権現であり、祭神は浅間大菩薩かと問うたところ、知らないと言われた。

西行

音に聞く磐手の森に来て見れハ

奥の不二とハ是も盤鷲

渋民で昼休み。このあたり3、4日はこぶしの花が所々で見える。大木もある。桜はまったくない。「我調服の花の下通しやらん、一笑呵々」。小俣村、平林村、雪浦村。並木のそとに垂松といって高さ4丈、幹の幅一抱えあまり。赤松で細い枝が柳の枝のように、嬋娟（あでやか）に地を払う奇木である。沼宮内泊。宿場の前まで終日北上川が隠見できた。町奉行小栗権左衛門が挨拶に来た。

4月6日 沼宮内から福岡

御堂観音 老人の年取日 たつこ芋

夜から雨。昼過ぎに晴れ。六時過出立。平地を1里あまり進むと山の登り口に清水村観音堂（正覚院、通称御堂観音）がある。松平忠明に従って参詣する。本尊は弘法大師の作。大同2年（807）坂上田村麻呂が造主。源頼義将軍が弭（ゆはず）で岩をうがったところ、清水が湧き出たという。御堂の左後ろに手水があり、その下から糸のように清水が出ている。1間に1間半ほどの溝を石でくみ水をうけている。すなわち御手洗である。この水が池をくだって、堂前坂の下に出て、これを樋でとおして石の手水鉢に入れ、そこからあふれた水が坂を下って小川となり、それから処々の水が落ち合って北上川となる。この水こそ北上川の濫觴（水源）である。源義家が奉納したという高さ2尺、径4尺の陣釜がある。鍔（釜の胴のまわりの張り出し）は

ない。後ろの山に義家社がある。山路の常影(とかげ)に残雪がある。従者に取らせて囃んでみる。珍妙である。

中山村、峠である。麓から2里17町という。廻国の修験者が路傍でかしまっていた。小繋で昼休み。山間の小村である。このあたりから岩手郡である。岩手山について、千載集では作用太夫顕輔が

思へども磐手の水に年を経て

朽や果なん苔の埋木

夫木集では、

陸奥の磐手の森のいはでのみ

思ひをつくる人もあらじな

とある。「断りながら章せば、いつれの儀にも取つへし、思ふ事はいわてのミ出込て、年経るそ浮世なる、黄石公子房にさとし、据壺順会ハ咎なき所のため也」。これからまた崔嵬(さいかい、石の山)である。小しや村(小鳥谷村)。石のある谷がある。杉が茂っている山をこしや山という。高屋村。このあたりから津軽では、2月1日を老人の年取日といって、古希の老人がいる民家では門松を立てる。その謂れはわからない。まえち川(馬淵川)、右(石)の清流である。

一戸前の小川を土橋で渡る。兩岸の木立がおもしろい。一戸は人足継場。小繋からこのあたりでは、山に畑を作り、野田が広く、山の姿もやわらかで、杉の木立も優しく、四方の山も狭いが、日が南で雪の遠山は見えない。波打峠まで5,6町。左右の岩は波打つ形である。岩間に砕けた貝がある。昔の末の松山の跡こそ「末の松山こさし」と詠まれている。女兒を祭る。今末の松山という所は松のみである。島から壺碑との間で、街道は険しい山をぬっている。峠を下る坂道は淑景(春のよい景色)で、黄鳥(鶯)の声が林中で聞こえる。

福岡の入口にまへち川がある。兩岸は珍観である(馬仙峡)。川端に立巖寺があり、洞窟の中に観音地藏を安置する。福岡泊。当地の代官上田平八が挨拶に来る。宿の主が立派な芋を葛で煮たのを出して、当所は芋どころでございます。これはたつこ芋といって、ここをお治めに

なる殿様から東都(江戸)へ献上されますものの余りを蓄えておいたので、今宵のおもてなしに差し上げますと言ってすすめた。このごろ鳥や魚の肉に飽きていたところ、私のために千里の「蓴羹未下塩類」と称して余さず食べて、腹が平らかに(おだやかに)なった。たつこ在という所でとれる芋ということだ。調理する前のものを取り寄せて見たところ、丸さは私の拇指でも回らないほどで、肩と等しい。これはことのほか小さいもので、献上するものは並の筒茶碗ほどの大きさだという。

4月7日 福岡から五戸

獅子の鼻 初めて海を見る

晴天。六時前出立。堀野村、長谷川、金田一。金剛坂・七堂坂・蓑坂、みな険阻。これはまことに九折坂である。「王隔比奴」などと思うけれど、蝦夷の主「嶺傑嶂」と聞いて思えば何のこともない。三戸で昼休み。宿中の隈原川は板橋が修復中のため土橋の仮橋だった。渡船役は松尾紋左衛門。休み所に葛西平左衛門が挨拶に来た。ひかね村、万遍川、知かね橋は土橋。橋の端に八戸道がある。ひかね獅子の鼻を仰ぎ見る。巨岩である。古川村、はかべ村、宮坂村、宮佐坂は長い坂、高山。西北のほうに津軽の八ヶ峯(八甲田山)が見える。右のほうには八戸領の山が見える。ある人はしやうはり山と言い、ある人はのたと言い、またある人はまくいか嶽と言う。どれか、と問えどもわからない。最も高いところで、左に海が見えた。この旅で初めて海を見る。左に海が見えるとすれば西のほうになり、不審だと人々が言うが、そうではなくてこの坂は折れ曲がっていてここは巳午(東南東)に向かって登るため、海を左後ろに見ることになる。海は東北の方角である。はるかに滄々(あおあお)としている。まことに遙か彼方で、杖を止めてよく見れば、「それかあらぬか、空か、海か」。麻水(浅水)は人足継場。とりない坂、五戸泊。終日山路だった。代官何某が挨拶に来る。

4月8日 五戸から七戸

渡船 野馬

晴天西南風。六半時出立。白山坂は残雪を踏んでいく。伝方寺（伝法寺）、小村である。藤島で昼休み。大坂川を船で渡る。桧の皮でできた大縄を兩岸に引き張り、渡守は棹を使わずその縄を手繰るため船は横に行く。こちら側の船役は鳥谷部又右衛門、向こう側は苦米地甚輔。ここからは広い原を行く。左に八ヶ峯が見え、右は雲に入って限りない平野。2里ほどで海岸だという。野馬が処々に遊んでいる。七戸泊。宿場の左に陣屋がある。代官高橋与市と牧田令介が挨拶に来る。

4月9日 七戸から野辺地まで

春興 初めて船を見る

晴。六半時出立。荒野で人の絶えた道を行く。左に八幡岳、雪がある。つほ川（坪川）は船渡し。手繰りは昨日と同じ。こちらの渡し奉行は佐原有右衛門、向こうは中原条作。石井村。街道に家がない。木を焼いて湯を沸かす。人足の休み所がある。「小丘に班荊して吹烟四、五筒す」。晴れの天気と景色が融和して、これに桜があれば殿山（東京都品川区御殿山）か飛鳥丘（東京都北区飛鳥山）の春興だと思うが、山影に残雪があり、6、7尺、あるいは1丈ばかりの厚さがある。野辺地泊。宿場の入口の坂から松林を越して蒼い波が見え、船も見える。始めて船を見る。これから先は海岸の逆旅となる。庭に紅梅が2、3花開き、大樹の桜や椿もあるがつぼみは見えない。されども野行すると綿入れ一つで汗ばむ。当所の役人箱崎助右衛門と山田軍平が挨拶に来る。

4月10日 野辺地から青森

陸奥湾

晴。六時出立。宿を離れてこれより渚にそっていく。されども、青森までは南部の山に抱かれて、鳩の海とも言うようだ。これから三馬屋（三厩）まで津軽領。（以下省略）

【復路】

8月18日 青森から野辺地

（前省略）野辺地泊。当所の役人山田軍平が挨拶に来る。

8月19日 野辺地から七戸

ヤマセ

翻風度雨（風が翻りたびたび雨）、終夜風雨。六時過ぎ出立。石井村で休み、前と同じ。長く見てきた海も今朝を名残に、磯を打つ波音は秋風の音となった。昨日よりヤマセの風、野分がたち、浮雲も「あしとく」、雨もはらはらと降りすさみ、行き先も見えない。千草の色、けだるい秋の野道を行くのに、輿の簾を垂れて、旅の心もやるせない。つほ川（坪川）端に渡奉行沢田有左衛門、向こうに米田友右衛門がいた。七戸泊。松平忠明は17日に三厩の海を越えたと聞いた。当所の役人新田梅左衛門が挨拶に来た。

8月20日 七戸から五戸

奥入瀬川 馬の病気

風雨。六半時出立。広野の雨、旅はいよいよ肅条（さみしい）である。大坂川、渡船役は小平三馬。この川の東にある村を大坂（相坂）村という。そのため、そのまま大坂川と呼ぶ。本当はおいらせ川（奥入瀬川）というそう。藤島で昼休み。五戸泊。雨歇雲散（雨がやみ雲が散る）そう。急がなければぬれないものを、という言い伝えは本当だ。代官樋戸奎兵衛が挨拶に来た。さきごろこの家に泊まった時、春便通がなく病んでいる馬は薬を食べろといわれるが、伯楽（博労）の薬も食べずにいた。人馬平安散という内藤金郷が贈った薬を服したところ、翌朝の出発時に便通があり、足もたち、乳も飲んだので感謝された。諺に、「抜かぬ太刀の高名」顔して出発したが、その馬はどうなったか、と問うたところ、20日ばかりは元気だったが、親馬の乳が出なくなってしまった。今一度遠山殿のような役人がお泊りになれば、薬をいただけたのと思うままに、なすすべもなく虚しく馬の死ぬのを見ていたという。あわれなり。

8月21日 五戸から福岡

畑の美観

晴。六時前出立。道をゆっくり歩き、田んぼを見渡して憂さを晴らす。麻水（浅水）は人足継場。三戸で昼休み。蓑坂の東の崖の下は野が広い。鎌沢（釜沢）、したさき（舌崎）村のあいだに川口川（馬淵川）が流れ、南岸から広劫（永劫）の田畑で、稲、稗、粟、大根、蕎麦、多葉粉などが入り交じり、畑の形は真四角で、盛んに生えている。老緑、若緑、赤紫、赤黄、青、白などの色を競っている。本当に作り物のようで美観である。そうじてこの辺りの山々では畑を作って色とりどりで、美しい。金田一は人足継場。福岡泊。代官上田軍八が挨拶に来て、郷書（村差出明細帳）を提出した。

8月22日 福岡から沼宮内

御堂観音 義家社 脛巾

晴。六時前出立。一戸は人足継場。小繋で昼休み。北上観音に参詣する。清泉が山から糸のように出て絶え間ない。石垣の中は水があふれて流れ、かわっていない。守僧に問うたところ、山より出る水は間断なく場所が変わるので、ある泉は石組みの中底から湧き出て、底は岩になっていると言う。よく見れば大きな白岩がある。小さな穴があって水がわいている。義家の社は、先日解らなかったので見に行ったところ、御堂の後ろの山を登ると仮屋があり、扉が開いていた。中は少しの飾りもなく、木像が一つあった。八幡宮の木像であろう。古風である。往路に約束していた縁起が書写されていたので、守僧に厚くお礼を述べて受け取った。沼宮内泊。町奉行小栗権右衛門が挨拶に来た。ここでは、ガマを折りまげて馬毛を刷毛のようにつけた脛巾（はばき、脚絆）を多く作る。

8月23日 沼宮内から盛岡

愛用の矢立

晴。六時前出立。角の長い矢立を作り3,4年持っていた。今回の旅でも片時も離さず懷にも腰にもさしていた。雪浦の垂松の下で物書きをしようとしたが、墨がかわいていた。野中で清

水もなかったので、道のほとりの萩の朝露を墨に浸して物書きした。この旅の調度のなかでこの矢立が最高である。古いものを愛して、はきのつゆと名付けた。森岡（盛岡）泊。下田唯記と町奉行小向因右衛門が挨拶に来た。

8月24日 盛岡から花巻

晴。六時過ぎ出立。郡山で昼休み。石鳥谷は人足継場。花巻泊。当地の役人小田島文助が挨拶に来た。

8月25日 花巻から水沢

薄曇り、七時過雨。六時出立。前沢で昼休み。金ヶ崎は人足継場。水沢泊。

8月26日 水沢から一関

義経堂 義経と弁慶の木像

暁に雨がやみ晴天。六時出立。前沢で昼休み。衣川の土橋が落ちたので船で渡る。去る19日の大雨で落ちた。中尊寺に行ってみる。道の西の坂を上り5丁ばかりはいる。前に記したとおりである。詳しくは、中尊寺が出版した冊子がある。判官の像は中尊寺ではなく、別のところにある。道は東3,4丁の登りで、山の上に仮屋を作っており、像は色彩のある木像で、他には何もない。白幡大明神という額がある。弁慶の像は大変良くできているが、最近色付けしたと見える。惜しむべし。義経の像も色彩は新しく、袖なしの陣羽織に団扇を持った姿は信用できない。一関泊。迎えの使者がなく、足軽が門外で夜番している。一句（10日間）して冷気が増え、小袖を重ね着する。（以下省略）

第2回 文化2年（1805）未曾有後記

景晋2度目の南部旅行は、文化2年から翌3年にかけて足掛け2年間の旅となった。前回の旅から6年後であるから、年齢は数え54歳になっていた。この間に景晋は、寛政12年（1800）に徒頭に、享和2年（1802）には優秀な旗本が就任する幕府の要職、目付に登用されていた。

旅のきっかけは、前回同様に日本近海における異国船の来航だった。文化元年レザノフが、かつてラクスマンに与えられた信牌を持って長崎に来航した。貿易開始を求めるレザノフに対して幕府は、平和裏に要求を拒絶し退去させることに方針を決め、その難しい交渉役として景晋を派遣した。そのときの景晋の旅日記が「続未曾有記」である。交渉は成功しレザノフは退去したが、幕府は蝦夷地への異国船の来航がさらに増加すると判断して蝦夷地全島の上知を計画し、そのための調査を目付遠山景晋と勘定吟味役村垣定行に命じたのである。長崎からの帰路を中山道にとった景晋が江戸にもどったのが5月8日、蝦夷地に向けて出発したのが8月13日であるから、約3ヶ月ほどの短い江戸滞在だった。なお、蝦夷地への出発日は『徳川実紀』によると8月15日となっているが、未曾有後記では8月13日になっている。どちらが正しいかは不明であるが、ここでは景晋の旅日記にしたがっておく。

旅の行程は、往路は前回同様奥州街道を進み、三厩で渡海し、松前には10月3日に到着した。そのまま松前で越冬し、翌年3月16日に松前を出発して海岸沿いに宗谷まで北上。宗谷でアイヌたちからオムシャという儀礼をうけたのち石狩まで同じ道を引き返し、石狩から石狩川、千歳川を遡行し、千歳から美々まで陸路、美々から美々川を船で下り東蝦夷地の勇仏にでた。勇仏からは前回の巡見のときに通った海岸沿いの道を進み箱館へ。箱館から佐井に渡海し、佐井からは下北半島の北岸の大間道を通り田名部へ、田名部からは陸奥湾を見ながら野辺地へ出た。その後は奥州街道を通り、前回同様日光社に参詣して8月13日江戸に着いた。行程354日、1年間に及ぶ長途の旅だった。

今回景晋は、比較的緊急性がなかったからか旅を楽しんでいる。壺碑や末の松葉など各地で歌枕や名所を訪ねそれらの考察に関する記述を残し、陸奥を旅した歌人西行の歌を思い出している。

【往路】

8月27日 金成から水沢

前沢の市

六時出立。一関で休み。中尊寺に参詣し、金色堂、経蔵寺を見て歩く。前沢は市の日で、「近里遠村」の男女老少が群れ集まって売買する様子は、ひなびて見える。折居村に新山権現がある。水沢泊。

8月28日 水沢から花巻

鎮守府八幡 蘇民将来の像

六時出立。いさわ川（胆沢川）は、前の街道より右へ5丁ほどである。反畝（田の中の道）を行くと叢林がある。八幡村の鎮守府八幡である。小さな祠ではあるが信仰を集め、参詣する者が近年多い。小池があり、小島に妙音天を祭る。これは縁起によると御手洗である。安永年中仙台の文人田希元、つまり田辺良介が作の碑がある。縁起の内容を漢字に訳したもので、写しがある。什物としては、坂上田村麻呂將軍の鎬矢と剣がある。縁起に「木雛のごとし」というお札を求めた。蘇民将来の像の言い伝えがあると寺の僧侶が言った。倉沢の関に相去があり、仙台藩の足軽町。番所の外は南部領の鬼柳。黒沢尻で昼休み。花巻の入口に豊後橋がある。花巻泊。

8月29日 花巻から盛岡

盛岡での歓迎

六時出立。郡山で休み。盛岡泊。ことさら嚴重に優待を尽くされ、その様子は豊前国小倉、長門国下関、肥前国佐賀と甲乙つけがたい。

9月1日 盛岡から沼宮内

岩手山と北上川の景色 金精大明神

長坂の途中に小野村がある。昨日の雲は四方の景色を塞ぎ、風も寒かった。岩鷲山（岩手山）の頂も雪が降ったようだ。綿入れを重ね着して玄冬（厳冬）のようだ。山々の葉は霜がおり、今を盛りと紅色が深く、高根の白雪にうつる。北上川、長坂の傍らに曲々折々して流れる風情は、富士の裾野の竜田川を集めたように、目も

あざやかだ。これを見る人もなくて散ることは夜の錦のようだ。洪民村で休み。真堀（巻堀）村に金精大明神（巻堀神社）がある。沼宮内泊。

9月2日 沼宮内から一戸

御堂観音 妻への思い 憐れな堂守

御堂村観世音に参詣する。血縁を結んで以来、私の妻は年中念珠を怠らない。図らずもこの度の使命のために再び御堂にのぼることは、おぼろげならぬ徳遇である。妻が整えた針工の物で旅立ちに受け取ったまま手箱に入れておいたものを取り出して、仏の御前に捧げる。堂を守る若僧に、以前お会いした僧は今も御堂に仕えているのか、見えないようだが、と尋ねたところ、その通りです、それは貧道（私）の親で、3年前に身まかりましたと言う。修行の身にはこのような事も憐れ深く覚える。堂守のみでは衣食も貧しいので、農業を兼ねている。火宅（煩惱に悩まされる）の僧だ。小繫で休み。一戸泊。宿場の入口にかつら清水への標識がある。ここより西、小道20里に大きな観音堂があるという。

9月3日 福岡から三戸

狭布

六時出立。福岡から小道百里ほどにけまない（毛馬内）という場所がある。鹿角郡のうちで、そのあたり一帯を狭の里（狭布の里）と呼ぶ。けまないで細い布を織る。普通に使うものではなく、望むものがあれば織るという。帰路のさいに欲しいと心を込めて家主に誂えを依頼したところ、ついに承諾を得た。金田市（金田一）で休み。三戸泊。入浴するころになって雨が降り出した。「急かすハ濡さらまし」の歌に反して、急いだから濡れなかったのだ。私はあっぱれな旅人だ。「呵々」。

9月4日 三戸から五戸

六時出立。麻水（浅水）で休み、五戸泊。

9月5日 五戸から七戸

六時出立。藤島で休み、七戸泊。

9月6日 七戸から野辺地

石文明神 壺碑考 日本中央の碑

六時出立。石踏村。石踏は石文。土民によると、天満館（天間館）の西に小さい森があり、その小さい祠を石文明神、この森を尾山という。尾山から坪村を経て野辺地に至るさみしい道がある。石文村は街道の西にあり、ただ2軒だけだが、古い名前を残して村としている。昔、石踏村にある石を今の坪村の上に引き上げて祭り、石文明神とあがめている。その石は社壇の下にあるという言い伝えがあるが、見たものはいない。由来を伝える書物も昔火災で失われたため、今では由来を知る者もいないという。野辺地の駅長に尋ねてもこのように答えた。考えてみるに、多賀城の石碑を俗に「つぼのいしぶみ」というけれど、つぼのいしぶみは他にあって所在はあきらかではないという識者の説もある。昔石文村は坪村のうちにあり、いしぶみのあとだから石文村と名付けられたのではなからうか。明神としてまつる石は昔の碑であろう。掾史中新（下役人）に五戸前後で数回尋ねさせたが、土人の説明は大同小異である。真実を伝えないことに関しては五十歩百歩である。

沢旭山（平沢旭山）という人物の紀行文（漫遊文章）には、『七戸で坪村の碑を問えば、坪村のつぼ川、石文村を言って碑の所在を知らない。坪村に至ると傍らに坪川がある。土人によると、ここを隔たる事数里に小祠がある。千曳と名付けこれを石文の社とするという。そこで行って見たところ、一つの小さな祠があるのみで石は見えない。野夫に聞いたところ、石を祠の下に埋めて祀ったという。ここを去って野辺地に行くと碑の所在を知る人がいた。ここを隔てること10数里に石文村がある。村の後ろに小山があって、山の麓に古い碑がある、文字は破壊されていて読むことができない、といった。そこで翌日行って見たところ、15、6里で石文村に着き再び尋ねてみたが、千曳の石の事だけを説明する。「其説潰々」。石文村はわずかに5、6家で、後ろに山はない』と記している。ここに記す土人の説明は、たいてい正しい。里数は6丁を1里として話したのだろう。

また、赤水（長久保赤水）の紀行文（東奥紀行）に、『私が考えるに、壺の碑はもと南部にあったと袖中抄にある。古歌はみな、南部の壺碑を詠んでいる。北郡七戸壺むらにある。碑面に日本中央の四字が彫られている。言い伝えによると、田村將軍（坂上田村麻呂）が書いたという。後世、これを埋めて祀り、石文明神とした。今碑はない。元禄年間我が藩（水戸藩）の武士、丸山可澄が東奥に遊び、南部の壺碑を尋ねた。土人の説明は同じようなものと紀行文に見える』、としるし、また豎石に日本中央と四字あって坪川の岸に建てた図を載せて、『考えるに、碑面に日本中央の四字がある。おそらく其の下に由来が記されているはずだが、字が細く摩耗しているのか由来の有無に関する記録はなく、今になっては解らない』、とある。この図は南部の医師川崎寿庵の蔵にある。赤水は寿庵の蔵を見たのだろうが、由来を記していない、惜しいかな。年久しく石文明神になったのであれば、それ以前に写した古図であろうか、今ではわからない。

顕昭の袖中抄では、『石文とは陸奥の奥にある碑で、日本のはてという。ただし坂上田村麻呂の遠征の時、弓のはずに石の面に日本中央という文字を書きつけたので、いし文という。新選歌枕に、信家侍従が言うには、石面長さ4,5丈ばかりに文字を彫り付けている。そこをつぼという。私のいう、みちの国は東の果てと思うけれど、蝦夷は島が多くあり千島ともいう。陸地でいうと日本中央にあるからだ』、とある。土人がいうには、南部北郡野辺地と七戸のあいだに坪村、石文村、坪川がある。昔いし文は坪川の岸にあったが、いつのことであろうかその里の主に考えることがあり、この碑を山の中に引き上げて埋め、その上に祠をたて石文明神としてまつた。石は大変重かったので千引の石という。ある書物に、4,5丈は4,5尺の間違いである、とある。私が考えるに、千引の石というならば「丈字」に疑いない。

あれこれ考えるに、そもそも右大将（源実朝）の歌にゑぞにあるとあり、その他の古歌も南部の坪村のあたりをいうと記憶している。なかで

も、西行と清輔の歌によると坪むらのこととなっている。哥枕名寄の西行法師の歌に、

陸奥はおくゆかしくぞ思ほゆる

つばのいし文外の浜風

がある。野辺地から外の浜まで海岸が続いているもので、いし文外の浜風という句の続きと合致し、坪村として適当である。また同書の清輔の歌に、

いしぶみやつがろのおちにありときく

ゑぞ世の中をおもひはなれぬ

とある。つがろは津軽だろう。今も野辺地から少し行けば津軽領である。昔坪村のあたりまで津軽と言ったのかもしれない。いずれにしても、つがろのおちにありときくの句は、坪村のことを伝え聞いて詠んだのであろう。その石文の祠に行こうとしたが、夜より風雨が激しく、かぎりない広野の道を走って従者たちも疲れたので、いそいで野辺地に泊まった。とふの菅菰（すがごも、すげで編んだむしろ）はここでよく作られている。まったくいにしえの製法という。家は特にせまい。（以下省略）

【復路】

7月7日 佐井

人馬の用意が間に合わず、佐井浜にもう一泊。南部領北のはての荒村なれば、他では佳節（七夕）だけど、ことさら心慰むことはない。けれども二星烏鵲の端（織姫と彦星をつなぐ天の川）ではないのに、帆船にとって良い季節になって、上国の地（本土）に移動し、帰郷を指を折って数えることこそ、うれしい。

7月8日 佐井

なお信宿（二晩泊まる）。郷書を受け取る。

7月9日 佐井から易国間

六時過出立。海岸の野道を東南に進む。ばらうた村。奥戸（ラクツヘ）の右の岡に牧馬（野馬）がいる。小さい岡を越えて大澗（大間）で休み。海中に弁天島がある。蛇浦。このあたりは水中や岸上に立岩や平岩が大小多数ある。出門から北に見える山々や、矢越、知内、当別、

箱館がはっきりと、湯の川、せにかみ沢、泊、石崎、汐首からゑさん（恵山）の岬まで長く連なり、その東は蒼波漫漫たるのみ。異国澗（易国間）泊。

7月10日 易国間から田名部

恐山

六時過出立。なお東南に行く。海岸の坂道である。下風呂村には温泉がある。このあたりを全て外南部と呼ぶ。蝦夷地のゑさん岬がことさら近く、東に南部の尻矢崎（尻屋崎）が遠く見える。下風呂を出るときれいな滝がある。次の坂道をむまおりつぽという。赤川村、木奥村、次の坂道を七曲りという。釣屋浜に降りて、また一山のぼりおりすると大畑村。大畑川がある。大きな船が川に入ることができる、大小4,500戸の港である。東に尻矢崎、北にゑさん岬が、はるか遠くに相對している。東の海にでる海門である。大畑を出て海岸の野道を進む。正津川村に小川がある。恐山から流れ出るということなので、三途の川であろう。

恐山は右側の峰々の中に頂をあらわしている。山中に堂塔があり、地藏菩薩を安置し、岡や谷の形が地獄のようであることを桑門のやから（僧侶）が宣伝するから、俗に名高い。高山ではなく、大畑から3里、田名部からも3里という。東にしばらく進み、林野を南に向かうとでと（出戸）村、関屋（関根）村がある。これから蝦夷の土地を離れる。年を越した海山といっても、特に見捨てがたいということはない。ただ白糸の瀑布の風景だけが、心をかえりみさせる。広野になってかばやま（栂山）村、田名部泊。

7月11日 田名部から野辺地

陸奥湾 とふの菅薦

田名部から西南に川が流れ、その続きに安度浜がある。ここには船が輻湊している。田名部を出て広野を2里ばかりすすむと、内海の渚にでる。ここから浦伝いに野辺地にいたる。絶えて久しい岩城山（岩木山）が見え隠れし、とうまい（多宇末井、青森市浅虫）、青森、平館の山々

が青々としている。昨日見たゑさん岬と尻矢崎を外門とすれば、平館と九艘泊の排列（配列）は内門である。細かく分けると、野辺地と青森の間に突き出た夏泊と九艘泊とは内海の西出門、九艘泊と平館は北出の二重門、佐井と箱館は東出の三重門、竜飛と白神は西出の三重門、尻矢崎とゑさんは東出の第四重門である。このように何重にも引きこもった内海であれば、波も平らかで、しかも秋晴れの青空が映り、眺望が良い。中の沢村（中野沢村）で休み。吹越、有戸、明前の村々は、海岸の風情は昨日と同じである。野辺地泊。去年9月6日、この海際に来てから今日の今まで、ただ波風のほかまじわる人もなく、あまさかるひな（遠くはなれたいなか）に年をこしたの、

わか旅は久しくあらじこのあがきる

妹が衣のあかつく見れば

と詠んだ人と同じ身の上となってしまった（万葉集3667）。去年約束していた十府の菅薦（とふの郡でとれるというすがも）が完成したという。古の製法を伝えるものは、当所にただ一人あるという。

7月13日 野辺地から七戸

石文明神

六時出立。石文明神に参詣する。山林の中に小さな祠があり、千曳の石というのがある。古い祠を壊して明和元年（1764）に造営したという。階下を覗けば床下に石首が髣髴（ぼんやり）と見えるという説もある。この祠を作る前の説だろう。今では四方の土際まで板を張り、少しの隙もない。碌々（役にたたない）祠守の「印像者」が千曳の石の由来を丁寧（ていねい）に反復して説明している。その説明たるや「潰々」。浅香沼（歌枕の安積の沼）と同日の談（同じような話し）だ。七戸泊。今日から面染（なじみ）の路程なので、矢立の筆もなまけがちになる。

7月14日 七戸から五戸

六時出立。藤島で休み。五戸泊。

7月15日 五戸から三戸

六時出立。麻水（浅水）で休み。三戸泊。

7月16日 三戸から一戸

狭布を得る 錦塚 波打峠 末松山

六時出立。金田市（金田一）で休み。福岡で休憩のとき、去年の秋に約束した細布が完成したかと問うと、「いしう成」と持ち出してきたので、厚く謝して長櫃に収めた。前に記した狭の里に錦塚がある。側にひとつつつ茅屋（あばら家）があり、そのうちの古川角兵衛という旧家で細布の製法を伝え、諸国巡見（將軍代替わりのさいの巡見使）があると必ず織って献上し、巡見使は青差（麻繩の錢ざし）1貫文を与える慣例があるという。それにならって、1貫文を与える。価格ではなく、その労を慰めるためである。そもそも細布を織るには、機織りの器具を新しく作り、月水（月経）を避けて日を占い、七日潔斎して織り出すという。売品の品ではなく、常にある品でもない。権力者の望みでも、風流者の求めでも、即座に得ることはできない。月日を重ねて完成するために、求めて帰る旅人も少ないのも道理である。

波打峠に杭が建ち、末松山の三字と書いてあった。去年の冬、領主（南部利敬）が領内を巡行したさい、ここを末松山（歌枕末の松山）と決定してこの杭を建てたという。末松山の松葉は三葉だという言い伝えがある。樹々を策られ（しらべ）たところ、その三葉の松があったため、ここで疑いなしということで定めたそう。いと便なし（大変都合が悪い）。どれだろうと高標（高い木）を仰ぎ見ると三葉があった。また水痕（水のあと）がある石壁に貝が出ているのを、なんとかはがしとって、三葉とともに持ち帰った。一戸泊。去年の今日派遣の命が下った。復命が遅れていることを思えば、「帰心益急也」。

7月17日 一戸から沼宮内

御堂観音

六時出立。小繫で休み。通法寺（御堂観音）の大悲閣に参詣する。沼宮内泊。

7月18日 沼宮内から盛岡

六時出立。洪民で休み。盛岡泊。

7月19日 盛岡から花巻

六時出立。郡山（紫波）で休み。数里にわたる松並木に涛声（波音）も絶え、秋の暑さは焼けるようだ。花巻泊。

7月20日 花巻から水沢

六時出立。黒沢尻で休み。水沢泊。

7月21日 水沢から一関

機織神社 加茂皇太神 東稲山

六時出立。前沢で休み。山目町に配志和神社があり、路傍に石碑がある。前記（未曾有記）に柏明神と、土人のいうままに記したが、口の誤りか、耳の誤りか。土人に、神主はいるか、伝来はあるか、と問うたところ、神主はいない、土地の者に聞いてみよう、と答えて引き下がった。どのような事を書いてあるのだろうか。また例の「観音ぼさつの垂迹沙汰か」と待っていたところ、里正（村長）が持ち出した文書には次のように書いてあった。『配志和神社は延喜式内の社。景行天皇の時、日本尊（やまとたける）の東征のとき、衣川に陣営を置いて蝦夷地を拓かれ、瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）、高産靈尊（たかみむすびのみこと）、木花開耶姫（このはなさくやひめ）の三神を崇めたもうた跡である。その後、菅丞相（菅原道真）の子寧茂が当国に配流され、父君の愛したもうた梅を植えて天満宮を祭ったもうたところでございます』とあり、『祭礼は3月、9月16日、天満宮は別社です』と書いてあった。あっぱれな答辞である。早計に見下げて通過していたら、どうしてこのような事を聞く出すことができようか。返す返すも物はあなどってはいけない。

一関泊。この駅は「吾勝郷萩野庄桜場」の里という。

西行法師

根芹摘沢の水のひまたへて

はるめきわたる桜庭の里

この宿場の北の入口にある一関川は、本名は磐

井川である。康平5年(1062)9月5日阿部貞任の軍卒が溺死した場所である。このことは前太平記にも載っている。

詠み人知らず

みちのくの岩井の水の千代かけて

くちぬみどりにみぐさゐにけり

宿場中央の南に機織神社がある。祭神は栲播千之姫(あめのおしほみみ)。または木花咲開耶姫、また稚目女尊とも。詳細はわからない。加茂皇太神がある。祭神は別雷命。天明年中から機織神社と相殿となっている。駅の南の鬼死骸村に高橋があるという。

西行法師

五月雨にふるの高はし水こえて

沼こそさきにたちわたりつれ

また、西に見える栗駒山を、

西行法師

陸奥の栗駒山の朴の木は

花より葉こそすずしかりける

さてまた、衣川の東にある稲東山は、昔桜の山だった。

みちのくの東稲山さくら花

よし野をここにかかるべしとは

と西行法師が詠んだという。これらの事も配志和神社の事も、本陣の亭主脇である作兵衛という好事家の話である。(以下省略)

第3回 文化3年(1806) 続未曾有後記

景晋3度目の蝦夷地旅行は、帰路に三陸海岸の巡視をとまなう長期の旅となった。前回の旅から帰った後景晋は、文化4年1月28日に朝鮮通信使の事務を命じられ、易地聘礼に向けて準備を始めていた。また、目付としての通常の業務もあり、3月には武蔵国羽村(東京都羽村市)で玉川上水の取水口とその周辺を視察していた。この玉川上水への旅日記と対馬への易地聘礼の旅日記を合わせて「続未曾有後記」とすることを考えていた景晋のもとに、カラフトやエトロフ、クナシリにロシア船が襲撃するという緊急情報がもたらされた。レザノフの部下

フォボストフが起こした事件で、魯寇事件とかフォボストフ事件と呼ばれている。この情報を聞いた景晋は、続未曾有後記に「函樞、松前の市中ハ勿論、郷民夷奴までも、もくりこくり、百万の雑具を負ふて足を空に逃迷ひ、郡県の忽劇大方ならす」と、ロシアの軍勢を元寇の時の蒙古軍・高麗軍にたとえている。

箱館奉行から急を告げる情報が届いた翌6月3日、幕府は御使番村上義雄と景晋に、さらに6日には若年寄堀田正敦と大目付中川忠英に蝦夷地出張の命を下した。メンバーには探検家近藤重蔵も含まれていた。このとき景晋は、幕府から金四郎では威厳に欠けるから名を変えるよう命じられ、左衛門に改めた。このことについて景晋は、先祖の名乗りである権左衛門から権の字を取り左衛門としたと述べている。この後景晋は、文化5年対馬で朝鮮通信使と対応するにあたって、諸太夫従五位下に叙任され、官途名を左衛門尉としている。この左衛門尉が実子の景元に継がれることになる。

旅の行程は以下のとおりである。6月11日江戸を出発し、奥州街道から大間道をぬけて下北半島の佐井へ。佐井から渡海して7月13日には箱館についている。ところが、ロシア船の姿が見当たらないので、箱館と松前周辺の海防体制を視察しただけで帰国することになり、9月12日箱館から三厩に渡海し、15日には野辺地についた。ここから若年寄堀田正敦は江戸に帰ることになったが、残った人々には東北地方沿岸の海防体制の視察という新たな指令が待っていた。中川と村上は竜飛岬から新潟までの日本海側を、景晋は南部から常陸国鹿島(茨城県鹿島市)までの太平洋側を視察せよというものであった。このとき景晋は56歳。高齢に加え僻地ゆえ駕籠を使えず歩行する場面もあり、困難な旅だった。それでも、現在の地方区分でいえば、岩手県・宮城県・福島県と順調に旅をつづけ、10月17日には鹿島神宮に参詣し、22日に江戸に帰り着いた。

続未曾有後記の読みどころは、もちろん三陸海岸の記事である。江戸時代の三陸海岸については、海防関係の絵図はあるが紀行文は意外と

少なく、漆戸茂樹「三閉伊路程記」があるくらいであろう（もりおか歴史文化館 2015 年企画展図録『旅の枝折』より）。江戸っ子の景晋ゆえ、南部の製塩技術や琥珀など見下すような記述がみられるが、三陸海岸の景観と美味しい魚に素直に驚いている。

【往路】

6月27日 金成から花巻

十万坂 海国兵談

十万坂は古い名前である。林子平の海国兵談巻9に、『仙台の国にかまほこ弓というものが多くある。十万打という言い伝えがある。藤原秀衡が武備のために弓を制作した所だという。かまほこはその形状から名付けたものである。十万打は高館の下に十万坂という所があり、ここで地面に弓を置いて十万張を制作したゆえ、十万弓と言う』と記してある。一関泊。終日肅雨（静かな雨）で炎暑を忘れる。

6月27日 一関から花巻

鎮守府八幡宮

鎮守（鎮守府）八幡宮に参詣する。今回の役目も殊に心中祈念するものがある。社僧が、字が書かれた瓦の欠けたものを昔土中から得たと言って見せてきた。所望して得た。いかにも間違いなく古瓦である。「珍敷、珍敷」。花巻泊。

6月28日 盛岡泊。29日沼宮内泊。7月1日一戸泊。2日二戸泊。3日五戸泊。4日七戸泊。5日野辺地泊。

7月6日 野辺地から横浜

去年の今日、箱館から船出し佐井に渡り、帰郷の旅程を楽しみにしていたが、今日もまた、北征のさなかである。

7月7日 横浜から田名部

百艘の船が寄る浦で、家数も多い。賑やかではあるが天さか（さかさまに）に鄙（おろ）いっても乞巧（きこう）奠（まつり）（星まつり）もおもしろくない。七夕の夜に泊まり、「さてますう」男に宿を貸す主の

心持は大変良く、飯盛る様子も清らかだ。疲れを休めるのは毎年毎年旅の空だ。「嗚呼々々」。

7月8日 田名部から易国間

ようやく浮雲が消えて、下風呂あたりから顧みれば糸さん（恵山）岬は掌中にある。はるかに、峯が東に長く走るのが見える。これは糸（襟裳）のあたりだろう。異国間（易国間）泊。北に見える蝦夷の山々の先がとがり、今年も同様年々歳々の使者を喜ぶように見えた。

7月9日 佐井泊。（以下省略）

【復路】

9月17日 野辺地から八戸

海岸巡見の命令 八戸藩のもてなし

六半時出立。東海・北海の地勢を視察すべし、という政府の命令を受け取り、北の溟（海）は竜飛から越後まで中川飛驒守（忠英）に村上監物（義雄）を添えて巡行し、東の海は私が南部から常陸の鹿島まで担当することになった。里数、戸数、要害の有無などは復命の時に提出した帳簿や絵図に詳しい。箱館から佐井の渡しは巡見のコースだが、東海の視察に取り掛かりたいので、部下の三輪何某と金子何某を、大間道から尻矢崎（尻屋崎）、尻矢崎から海岸沿いに平沼、倉内、市川へ向かえと命じて派遣し、部下の加藤何某と末左吉、藤文治の3人を連れて五戸を出発した。

少し行くと八戸道の傍示があつて左折する。これより「西生」の道なので、輿に座ってもめまいを覚える。原野を進むこと2里たらずで奈良崎村に着く。これを過ぎれば南部家の分家八戸侯の領地である。正法寺村。「春田」はない。右に流れる田の用水を野佐川という。三条目村。このあたりから耕地が広がる。北には長峰が連なり、大小侯（盛岡領と八戸領）の領境。長苗代村の農家は南の山林にそばに遙かに連なり、南から北へ向かってまへち川（馬淵川）がこんこんと流れている。橋の長さ百余間ある。流れる川は、八戸の北をまわって八太郎崎で東北に向かつて海に入る。八太郎村も大小侯の領境で

ある。まへち（馬淵）の端を渡ると売市村。その杉林を入っていき、八戸泊。八戸藩士による警固や従者などは大藩に劣らず、宿舎の優待は「宗堂」にもまさり懇切である。市中の殷富（賑わい）も盛岡に次ぐようだ。東西の往来が長く、700戸あるというけれど、実際は1,000戸を超えるようだ。塁壁（城壁）は市内の北にあり、出口の小門は見えるが大門は見えず、経営（警衛）はどうなっているかわからない。市内の東に足軽町があって、その先1里ほどに湊村がある。一つの川が南から来て海に入る。まへち川とこの川が三面を廻っていて、八戸の外堀となっている。

9月18日 八戸から角浜

大堅と小堅 蕪島 物見石 烽火台

六時出立。雨は上がったが風はなお烈しい。東北に向かって行くと、湊村の入口に川がある。高家川とも、新田川（新井田川）とも、湊川とも。ところによって呼び名が違う。川の末、海に入る所に深い林がある。日和山という。船溜りの場所。湊川にかかる橋は60間ほどあり、東に渡ってここから海岸に行く。白金（白銀）村を過ぎて、鮫村にいたる。ここは東北の隅である。小さい岸に武夫軽卒の吏（武士や足軽）が番する小屋がある。大堅めという。戌楼（物見やぐら）ともいうべきものだ。兵器を立ち連ね大筒と小筒を若干備えている。2,3町隔てたところに蕪島という小島があり、弁天社が建っている。今日は小舟では渡れない。潮が引いたときは裳をかかげて行くという。この島をたよりにして繋ぐ船もあるけれど、ここは湊ではない。番小屋から遠眺（遠見）すれば、中程におくろ岳（名久井岳）が雲間にそびえているのが見える。これも八戸藩の領堺。南西の近くには日和山、次の叢林には八太郎村、それからほるか西北に嶺がつらなっている。野辺地や田名部の山々は北北西にあたる。大きな山は泊山で、尻矢崎（尻屋崎）はその陰にあるという。北北東から東は大瀛海（大海）で、「虚空積水」が蒼々としている。

そもそも、このあたりから東海岸の村落へは、

大家登極（将軍代替わりのとき）の巡見使も往来しない。まして顕職（高官）の通行は未曾有という。これなども未曾有記中の未曾有である。鮫村を出ると小高い石が路傍にある。物見石といって巨石である。石のそばに篝火を焼くための小さい堤と、烽火を挙げるための径2間深さ1丈ほどの穴がある。八方を望む要所である。白浜、源久保、種差、法師浜、大久保喜（大久喜）、金浜、大蛇、櫛、小ふね渡（小舟渡）、角浜などの村々がある。鮫村から岡陵（丘陵）に登り、汀渚（なぎさ）に降りる。つまりは、海辺を東南に進む。ここに至るまでの危険な所は、突出した崎岩大石に前出崎、田村崎、大石崎、郷路崎、赤石などがある。赤石には不虞（思いがけない）の備があり、大筒を打つための仮小屋がある。小堅という。角浜村泊。

9月19日 角浜から中野

製塩 鹿糠の窓岩 化石 烽火台

六半時出立。金浜、大蛇村のあたりまでは鰯漁を営んでいる。それを過ぎると暗瀬が多く波濤が荒い。波が海底の岩に砕けて身を保ちがたい。そもそも魚も寄り付かず漁業もできないので、村々では塩を焼く。大きな土かまどを高く築いて、径6,7尺ほどの大釜をのせ、茅ぶきの小屋で覆う。潮水をそのまま汲み入れて、薪をたくさん焚いて塩を煮るという。山は近く薪は多く取れるが、広い砂浜がないのでやむを得ずこのようにして作る。味は下品だという。都の人が知っているような、砂浜に潮水を汲み流し、砂に付いた潮を煮て塩にするという普通の塩浜ではない。

平内村、川尻村。小川があり13間の土橋を渡る。小橋村にかさつき崎がある。鹿糠村に窓岩がある。玉川村。小川があり、また窓岩がある。戸類家村に戸類家崎がある。宿土村。「瑕荊」（休憩力）して茶を喫す。側に奇絶（絶妙）な巨木化石を見つけた。追従している八戸藩士に依頼して、船便で江戸に運ばせた。土釜崎。このあたり礫浜では木の化石が多い。八木村、小子内村。小子内崎がある。ここに猿か落場という岬がある。上に不虞の備がある。小堅である。

その南に枝城という岬がある。烽火の設備があるのみ。城の字が下たという音であろう。山林の中に分け入って、石洞を渡り、中野村泊。

9月20日 中野から野田

北野牧 牛島 久慈 琥珀

六時出立。山坂、林野を進むこと13里ばかり、本波村にいたるまで左は松林が深く、そのさきは北野。北野は牧といって馬の産地である。牧の東は侍浜や崎白前村がある。出崎まで行くには10余里の回り道である。麦生村を過ぎて磯の上に出る。南南東に向かって不虞の備がある。小堅めである。下に弁天島、牛島がある。ここから南をさして山道を越えた先の海岸は、久慈から東にあたる。左に弁天島と牛島があり北東の方角にあたる。右に小袖崎が南東に差し出ている、波が静かである。小さい湊の形をしているが、牛島を頼みとするのみで、船が安心して碇泊できる場所とも見えない。三つの流れが合流して海に入る。清流なこと「殆枕すべし」。川の左右に人家があり、久慈村という。士大夫の通行は前代未聞なことで、近郷近在から老少を問わず見物のため群集してくる。ここから6里北に久慈の八日市があるという。大変賑やかな集落らしい。その後の山で琥珀を出す。琥珀を帶しめ、根付などに加工し、ここに運んで売る。目を留めるほどの細工ではない。

砂川を「一葉」して渡ると、汀に不虞の備がある。大堅めである。それより南南東の浜伝いに、山腹に立てた諏訪明神がある。祠を左にみて右の山道に入り、長沢の上という所に堺の垣があり、ここから盛岡藩の領分となる。また山路を昇り降りすると海辺に久喜村がある。さきほどの諏訪神社から左に進み沙涯（みずぎわ）を行けば、轟の滝、二子村、大尻村、小袖村。ここから南部領。小袖と久喜とは山を隔てて南北一対である。双方から山崖が押し出して絶壁がある。これを三野崎（三崎）という。その形が凸の字の頭のよう。小袖と久喜とは山道が絶えているという。又6,7里の深山を越え、駒籠村を過ぎて、城内村に泊まる。海水が引いたときは久喜から崖沿いに城内村に行けるという。

野田領内の城内村である。海際の茅屋、日々いうように、とりもなおさぬ蝦夷である。

9月21日 野田から黒崎

野田の玉川 弘法大師の暁石 鯉に舌鼓

六時出立。村を離れて浜路に行く。米田村が右の林の中にある。行き当たった山崖に浅い川が海に流れている。これを玉川と言い、これこそ名勝の野田の玉川だという。本当に野田の水源と見える。波音高い場所なので、潮風が寒いという言葉をかけあう。今朝は特に風が寒いけれど、千島は見えない。右の山の鼻にある白い大岩の松は、折れ曲がり上は平らになっていて面白い場所である。西行屋敷という。いつもの付会の説（こじつけ）であろう。川を渡ると玉川村である。山道にかかる下り坂は特に急峻である。溪流の傍らにある孤村を下安家という。溪流にそって行き、海口を小舟で渡り、また登り坂。最も陰難である。両崖の石が積み重なり、道は屈曲が激しく、多くの「さつら石」を作って高く築き上げているようだ。小さいと言えども城跡であろう。土民は弘法大師の暁石という、例のあれ（こじつけ）である。山を下りて堀内村で休む。村は海岸上の林の中にある。村を出れば、人の顔と同じ高さの灌木がうっそうとしげる道。白井、力持、普代村など、「峻嶺窮谷」にすぐれ指を折ってはいけない（数えられないカ）。黒崎からようやく東に向かい、山下の太田、名部村で浜に出て、また大岩を踰尽（こえつく）して黒崎村泊。

堀内から2里3町、有司は42町を1里という。検断の村吉は6町を25里という。街道でもなく、宿もない。広大な散地であれば、代官、乙名も距離を測れない。高所の岬は東に突き出ている。難所はとても遠路に感じる。小石を建てたのを昨日みたが、三崎野と南北相對し、野田、玉川は向きも逆で、その形は弯（弓なり）に似ている。毎日海岸を行くが、荒磯や山里のため鮮魚をみることはない。ここで鯉を釣る船を3艘見た。買い求めて舌を打つ。

9月22日 黒崎から小本

ぼなりまさ 鵜の巣 鮎と鮭

六時出立。海岸の山坂。小野村、机村を過ぎて海面を見下ろすと、一樹があった。「ぼなりまさ」という。「ぼなり」と呼ぶ理由は知らないという。そもそも「ぼなり」とはいかなる言葉かと問えば、牛がなまって「ぼなり」だ、といった。松がなまると何というのだろう。「呵々躊躇はた回望」。目に入るのは山以外にない。だけど、名山がすべて高山ではない。坂下に礫の川がある。双子の山根1町ほどで砂浜にでる。ここから岸に羅賀島、野越、切牛などの漁村がある。その道は大変険阻で、牛馬も通らず、樵も行くことがない。切牛で道が絶えている。潮水が美しい。明戸村。振り返ると「林沢鬱密」の中に、僅かに山のあいだの戸を開けるようで、真東に「蒼溟活鳥」なので明戸となづけただのだろう。ここから海を振り切り、ひたすら山の隈（曲道）を進み、礫の川をさかのぼる。明戸の民家を過ぎて、また急坂を登りきると、山の上は広い野原で、「林標」がはるか遠くで、海と空は同じ青色だ。田野畑村で休み。またまた胸を突く坂に「脆を冷し」足を見る。いつも難所難所とかくのも煩わしい。ただ、目かれ（目を離せない）のは、峰々谷々の薄く濃く錦のような木々の紅葉の美しさ。紅於二月花（二月の花より紅なり、杜牧）の句を、いくたびも味わった。ときどき時雨が降り、糞よ、笠よと忙しいが、かすかな景色は一層の眺めであった。浜岩泉。大芦村ともいう。ときどき海辺を跋涉すると小本川がある。西岸は中野村。小舟で東岸に渡り小本村泊。宿は海際の山陰にある民家。川は山のあいだから海に落ちる。帆席（帆船）の入る所ではない。川には鮎が下り、鮭も上がる。そのほか漁業に利しているという。10日の郷書が出された。

9月23日 小本から鉾ヶ崎

難所 疝気

六時過ぎ出立。朝、戸を出ると戸外に一嶺が秀でていると吟じて、「里門」から遮二無二に山道を登る。小成、摂待、小堀内、おさなる沢に降りて入り江の隈（奥）が部村。太郎村で休

み。入り江の口の水底には岩が多い。釣り船も岩の間をぬって出入りするので、売船がくることもない。さらに海の近くを進むと、山基（ふもと）の絶え間に凹字のような小さい浜が二つある。「るつへとや」という。崎山村、大沢村。ますます海が近い。小本から南南東に向かって海に続く山道である。日々変わらぬ難所ばかり。いつものことだ。鉾ヶ崎泊。疝積（下腹部の痛み）で体中がすこぶる悪く、筆を執るのも物憂い。

9月24日 鉾ヶ崎から津軽石

宮古の繁昌 早池峰山 遠見番所

五時前に出立。そもそも宮古浦は「輻輳の計会」（たくさんの船が出会う場所）。南部領内の「巨臂」である。土地は南南西に向かい、南から東北まで連山囲繞（山々が取り囲み）して入口となり、北からは西のほうへ隠れていて、南西の岬が二重の屏風となっている。西から宮古川（閉伊川）が流れてきて、「洲岐」がさまざまな形をして、漁師の家も所々に見えて、「幽景」このうえない。東の小さな山を隔てて、その東にも松の巖が高く築地のように出ていて、前山の岬に迫る。この場所を海上から見る船舶は、北北東に見て乗り入れてから旋回し、再び北北東に向かって鉾ヶ崎の浜に進み碇泊する。鉾ヶ崎の海岸は船を泊めるに便利なので、「危檣も森々たり」（高い帆柱も森のように盛んにしげっている）。宮古町は数百戸が縦横に立ち並び、商売繁盛である。後ろには田んぼが広がり、山の麓の遠くに村里も見える。鉾ヶ崎は百余戸ある。産業をはじめ、「近隣遠郷」まで宮古に付き従っている村里が多くある。盛岡城まで3日程という。当山海の方位は図面にある。

鉾ヶ崎の宿舎を出て、屋後の山をめぐる宮古町に入ると、西の方角にある峰々のうち、雪がある嶺が一つそびえている。早池峰だという。宮古浦から盛岡への半途にあり、宮古川の源だという。町はずれの川を船で渡ると藤原村。それから入り江の南の汀をまわって西南に折れて、入り江の西岸、山沿いの道を行く。鉾ヶ崎の前山は東岸。我が行き先は西岸である。入り

江の口から数里南に進むと磯鶏村、八木（八木沢）村、金浜村。入り江で小木が立ち茂っている磯を高浜という。金浜から斜めに南行して入り江の詰まる場所に荒川が流れ込んでいる。荒川の側に津軽石村がある。南部領は特に海辺の山地なので山坂でないところはないというけれど、野田から宮古まで三日三晩の艱難に、鬱屈しないものはいない。今日はただ普通の野路や山路を行くことを喜び合う。津軽石村泊。自分は「志を療し」（気持ちを落ち着かせ）、さらに従僕たちを慰労するため、この里で足を止める。

荒川を渡った先、東岸の赤前村から前山を越えて南に向かう岬がある。この岬を根として宮古の東の岬に続いている。岬のすこし北に進むと東西をつなぐ重茂岬に遠見番所があるという。壮年の部下に行って視察せよと命じた。一言の不平も言わず承知して向かったが、から足を踏んだようだ。小船に棹をさして赤前に出た。

9月25日 津軽石から山田

山里の朴実 遠見番所 干カサゴ

六半時出立。屈曲して流れる荒川を三度渡ると山路に入る。石岬。石岬村は小石の河原がある先ほどの荒川の上流である。西に荒川村がある。荒川の水源。ここから東を回って津軽石に出る流れである。豊間根村、ふな岬、山屋（山谷）村まで坂道。ここ数日村里の様子をみると、男である限り役が科せられるのだろうか、老幼や女兒のみが籬間（まがきのあいだ）にのぞいている。役夫の人数を減らすように伝えたところ、追従している役人は、このような海辺を殿様が通行されることはまだ聞いたことがない、将来もないだろう。今日役夫に出ることこそまたとなき幸せだと答えた。「烏合し精力するもの役を除ふひなく」（烏合の衆でも精一杯働く者の役を取り上げるのは可哀そう）なので、あながち禁止することでもないという。いまさら言うことでもないが、お金の御威光を仰ぐようだ。さらに、山里の朴実を憐れむべきものだ。宮古浦の南にある岬をいひ坂というけれど、道も広く険阻ではなく、農商漁師の家、村の中を走り回る人々、宿舎の設備、送迎の様子

など、城下や街道の宿場とほとんど変わらない。

山を出て内海の水際に山田町がある。山田町泊。山田町は200戸におよび、町は東に向かって、幅1里あまりの入り江である。北の山のところに大津（大沢）村があり、岬は東北東にあたる。右の方を見れば、南から藩屏（屏風のよう）の山が西に向かってあり、そこに大浦村がある。山の外向きに小谷鳥村があり遠見番所がある。その岬は北北東まで延び、町から見れば左の岬と右の岬で左衽（えり）のようだ。中央に青島（大島）がある。漁業が盛んなところで、江戸に出回っている干カサゴの大半はここから出るという。商売船も出入りする。偶然にも網を引く船が落葉のような眺めである。興味深い。

9月26日 山田から大槌

四十八坂 野島の小寺 鯨山

六半時出立。田んぼの水が氷結し、道には霜も深く降りた。朝日の影、入り江の家の煙が多く登る晴れた景色、趣がある。ここから四十八坂という。織笠村から見れば入り江の海の門が明瞭だ。双方の岬の間は5,600百間という。織笠から入り江の西面を回って舟越（船越）村で休み。この地形は、左に入り江を抱きかかえた出崎がある。その途中に田野浜村がある。この出崎は、船越を要として末広がり扇のようになり、北岸は輪のような地形で山田湾の外垣となる大浦で、南岸は南に向かって弦月（半円の月）の形をして浪板村の北の垣根となり田野浜村がある。南北・東西とも長く、途中に小谷鳥村がある。田野浜、小谷鳥、大浦は一つの山の周囲、南・東・北に背中合わせにある。田野浜岬の近くに大島と言って横長に見える島がある。山があり人が住むという。浪板の南にきりきり（吉里吉里）村から出た岬の右に野島があり小寺がある。ここから南西に向かい、赤浜、安渡がある。頂上に小さい潮水があるという鯨山の尾の先に、四十八坂の頂点である大津岬があり、そこから見渡せばすべての岬が一瞬に見える。田野浜の岬と野島とは手綱を取った二つの手のようで、野島の南から遠くに見えるのは鶴住居村

から続く箱崎、白浜などすべて見える。白浜崎と田野浜崎とは「遡焉闊として碧浪天を隘す」(広々として青波が天をつらぬく)。浪板は東に向いた水際の小里である。吉里吉里は大きな村で、川にも山にも面している。ここから海を離れ山道を行き、四十八坂も尽きて入り江の安渡浦に出て、渚にそって大槌村に行く。大槌町泊。大槌町は200余戸、入り江の最も奥にあり、南に小さな岬があり大槌岬という。

9月27日 大槌から唐丹

尾崎明神 塩釜 領界の榜示

六時過出立。大槌崎の根元の嶺をまたがる坂を御香坂という。坂の登り口に大杉が一本あり御広松と呼ぶ。その理由はわからない。厳しい道である。嶺の頭には岩を裂いて道を通す。左側はさらに高く海は見えない。このくんだり坂の左の山の向こう一面に大槌湾があり、また右には小磯の入り江がありこれを室の浜(室浜)という。嶺を下り海岸に降り、片側を山に沿っていくと片岸村、鵜住居村。鵜住居村に浅い川が山から出て海に注ぐ。ここを基にして長く反り返った山々には箱ヶ崎、白浜崎があり、出崎の長さは2里ばかりである。ここまで船越から通過してきた入り江の形を考えると、船越から出た田野浜崎は北に、鵜住居からでた白浜崎は南に、吉里吉里から出た野島崎は西に向いた鼎のようで、入り江の形は「心字」にも例えることができる。鵜住居からまた山間に入る。小犬峠(恋ノ峠)は名前のとおり。両名(両石)村は中谷にある。村の端から水海坂を登ると、入り江が見える。村には小川があり、ここから一鳥嶺に登る。険しく、高く、長い道。王尊が馭者を叱ったのは九軒坂というが、この坂は九の下に十の字を加えるべきだ。20町ほどして嶺に着いた。東を見れば左に箱崎の南面にあたる桑の浜と刈やと(仮宿)崎が、さらにその東南に三貫島がある。右に首を回すと直下に人家がある。歩み寄ってみれば釜石村。釜石村で休み。

東は「層巒を蒙り」(重なり合っている山に覆われ)、向かいの山は平田から出て西・南・東まで取り囲み、その先端を尾崎という。物静

かな内海、繫船の便、魚網の利がある。南向きに300余戸が簷(ひさし)をならべ、住居がつきず、「義門の調度」がある様子も明らかである。市中に尾崎明神の祠がある。釜石の後ろの山陽(山の南側)を西へ廻り、また方向を戻して川を過ぎれば松原村。また戻して流れに沿って山陰(山の北側)を海山にならんで行く。このへんから目を凝らすと、釜石の崎と尾崎が南北の海門になっていて、双方の岬は蟹がハサミを出したように似ている。川と海と接するところが嬉石村。釜石と南北に相対している。嬉石から南、山に入り、坂を登ると平田村。なお釜石と尾崎とが大洋に出ていて、真っすぐに開いている。1つ2つの塩釜がある小浜である。また山を分け入って狭隘急峻に登り詰めれば、頂上に仙台藩との領境の榜示がある。一休みせずとも、下り坂が急だ。危険をしのいで洞口に出て、唐丹泊。左の山は領境。山崖に漁師の家がある。花露辺(ケロヘ)という。その東の岬を鷺巣崎とう。右に仏ヶ崎という小磯があり、その東西の家は300戸に満たない。鰹をよく釣るという。

9月28日 唐丹から盛

新山権現 鉄台峠の悪路 盛での出迎え

六半時出立。海上桜峠を過ぎると小白浜。仏ヶ崎を左に、右の小さい岡、抜木峠を経て片村を南に回ると大石浜。その岬はしこち崎とも根崎ともいう。その中央にある小岩を蒜島、小島を金か崎という。しころ崎と鷺巣崎を門として、唐丹から一つの入り江である。片岸村の中央の小川を渡ると新山権現がある。胸突坂ともいう熊の木峠を越えると荒川村。荒川が西から東北に流れて、「跡の片岸大名の間」を海に入る。荒川村から天を衝く嶺に登る。鉄台峠では巨石が肩をすり足に触れる。前後を見渡し、足を高くして、身を片側に寄せて過ぎる。肩輿にのることができないのは言うまでもない。石や樹木の根が折れ曲がり、轎夫たちは空の輿を頭上に挙げて登ることすら危険である。今回の旅ではたくさんの急峻を経たが、このような困難は初めてである。仄経悪路(かたむいた悪路)を2里ほど進むと吉浜村。左に根に白(根白)

浜につづいて東に回ればチン才浜。また北に進めば唐丹から白く見えるしころ崎。右の岬はからへ崎、両ツの崎。大手を広げたようで、絶えず大きな波がたち、帆を下げるができない。漁業の利益も少ないという。吉浜村のうち本郷村で休む。唐丹からの3里3町をここでは小道21里という。また村の老人は61里という。ともにおおよそで符号しない。

浜から林野を西に入ると、岡の隅に茅屋がある。それから山道を西南に行き、鉄台峠の災いが続いているようで、石の道に悩まされる。小道25里を進むと平地に出て人家がある。立ッ根ン（立根）村という。立根川の長流を左右に渡ると、両岸は「線竹瀬」のようだ。ほとんど洪恩とも称すべきである。田んぼを過ぎて権現堂川の板橋を渡ると猪ノ皮（猪川）村。盛郷のうち田茂山町泊。山中にしては家数の多い町である。田のあぜのように道は左右に曲がり、闇夜に到着したのに、数十町のあいだ路傍に松明を立ち並べていたので枝折（目印）になり、道に迷わなかった。町では家ごとに美しく飾った提灯を軒先にかけてあり、趣ある出迎えの奇観だった。部下の三輪善が役目を終えて本街道を駆けつけてきて再会した。

9月29日 盛から高田

盛六村 通岡峠

六時過出立。町を南東に出ると田んぼが広がっている。左の山にそって赤崎村の耕地が続いている。赤樹（赤崎カ）村に連なる山の後ろ、東に綾里村、その外にある越喜来村は吉浜の南隣になる。越喜来は東に面し、右の方は泊まり浜、東に進むと崎浜。その畔を北へ回るとから尾崎。これは吉浜から見えた右の岬である。泊浜に並んで甫嶺浜。それから南東に進み綾里の北浦は小石浜。東は砂子浜。その岬をすね（脚）崎という。これが越喜来の入口である。越喜来の東西を白浜という。左は砂子浜の裏、南面の岬である。右の岬は綾里崎。これが綾里の小口である。この二口とも海への口は開き、包みこむことはない。綾里岬を南西に回り、また北へ入ると入り江がある。東岸は田浜、西岸は湊浜。

これから南西に出ると合足浜。これは赤崎村の一部。なお南西にいくと赤崎に入るといふ。

盛川の長流は南に向け海に入る。立ッ根、猪川、田茂山、赤崎、大舟渡、しころいち（日頃市）を盛六村という。ここから入り江の形は南へ流れ、東岸は赤崎の山が南東に流れ、中赤浜、永浜、米の浦、鮎（鮎）の浦、その岬が尾崎で、長さは小道8里ばかり。前にさんご島がある。西は大船渡村で、矢崎、下大船渡がある。東西の岸の距離は小道3里ばかりで、湖のように「健漸幽色」である。大船渡の西南は末か崎村。この山は南東まで延びて、細浦浜、泊浜はある。東の岬にあるついの崎と尾崎の山はずれていて、海口は東南東で、船路がある。末崎村は、西南に友村、広田村、今泉を見渡すという。末崎の北にとりつき、通岡峠を西に越えると浜田村。海岸に出ると田村。高田町は百戸ばかりのよい町である。今泉村の今泉川は二つの流れになって海に入る。15間の小橋と50間の大橋を渡って今泉町で休み。今泉町は200戸ばかりのよき町である。高田と今泉はともに入り江の奥にある。左は浜田村、勝木田村、小友村、広田村の岬まで今泉から5里という。右は、長部村、西南に斜めに進むと小原木村、唐桑村。ながく出ている岬を御崎という。今泉から川に従って入り江の西にある長部村の松坂峠を西南に越えて小原木村に出る。（以下省略）